

## 命のバトン

三年 赤池未羽

私が小学校二年生の時、我が家に犬がやって来た。どうしても犬が飼いたかった私は毎日のように「犬がほしい」と親にお願いしていた。最初は「生き物を飼うことは簡単なことではない。」と何度も反対されたがあきらめきれず、ついに父と母が折れてくれた。こうしてやって来たのが柴犬のももちゃんだ。

ももちゃんは茶色の毛並みが美しく、くりくりとしたつぶらな瞳が愛らしい女の子で、初めて会った時の喜びは今でも鮮明に覚えている。当時の私は「毎日散歩に行く！ごはんもあげる！」と張り切っていた。しかし、その気持ちは長くは続かなかった。次第に私は自分のことを優先しお世話は父に任せきり、散歩も食事の用意も毛並みの手入れもすべて投げやりになった。私は、それを当たり前前に思い、感謝の気持ちすら持つことができなかつた。

そんなある日、突然の出来事が起こった。私の父が心筋梗塞により亡くなったのだ。突然のことに信じられない気持ちとどうしようもない喪失感でしばらく何も手につかなかった。家の中は静まりかえり、今まで当たり前だった父の存在の大きさを思い知った。

気がつけばももちゃんも元気をなくしていた。父の遺影をじっと見つめる姿を見て、「きつとももちゃんも父の死を悲しんでいるんだ」と感じた。

それから私は、少しずつももちゃんのお世話をするようになった。久しぶりのお世話を初めはぎこちなかつたが、散歩やごはんなどの時間を共に過ごすうちに、私はももちゃんに対して今までにない感情を抱くようになった。小さなぬくもり、うれしそうにゆれるしっぽ、あたたかく甘えるようなまなざし。その一つ一つが私の心をやさしく包み、傷をいやしてくれた。

あの日からももちゃんは私にとって「飼っているペット」ではなく、「大切な家族」になった。お世話をする中で命と向き合うということの重さ、尊さを知り、父がどれほど大切にももちゃんの命を守っていてくれたのかようやく理解した。

動物は言葉を話せないが、確かに心がある。嬉しいときは体全体で嬉しさを表現し、私たちが悲しいときにはそっと寄り添ってくれる。だからこそ、私たち人間が責任を持って、その命としっかり向き合うべきだと強く思うのだ。

私は、ももちゃんと過ごす中で、本当の意味で「動物を愛すること」を知ることができた。今では、ももちゃんは私の毎日に欠かせないかけがえのない存在だ。これからもずっと、この子と一緒に笑い、守り、支え合って生きていきたい。